

ドイツ社会民主党に於ける組織論の陥穽

西尾孝明

はしがき

一、ドイツ社会民主党の変節

二、組織拡大によるドイツ社会民主党の変貌過程

(1) 統一的社会主義理論の分裂

(2) 数の増加に依存した組織論の悲劇

i 組織拡大による保守化

ii 集権的官僚制の形成

iii 技術主義的官僚制の抬頭

三、ドイツ労働組合における中立主義理論の陥穽

民主的な行動に必要な組織は、また、保守的な水が民主的な流れに流入する泉でもある。

——ミヘルズ——

は。し。が。き。

近代市民社会より大衆社会への二十世紀的移行現象は、それに見あった国家形態の展開、すなわち、市民的議會制国家より大衆国家への再構成を必然ならしめた。独占段階に突入した欧米資本主義の生産力の上昇は、生産力の社会化を動因として、労働者階級の量的な増大と新中産階級の登場とを可能にした。かくてデカルトの理性とロックの経験とを理論史的背景として形成された市民社会は崩壊し、資本主義にとっては論理的前提でありながらも、市民社会にとっては非存在であった圧倒的人口量、すなわち労働者階級と新中産階級とが、今や政治過程の前面に進出するに至ったのである。⁽¹⁾二十世紀に於ける社会主義政党的飛躍的な組織の拡大が、かかる圧倒的な大衆人口量に支えられたことは言う迄もないが、政党組織の拡大は十九世紀的な名望家政党的合理的な大衆政党へと移行せしめる要因でもあった。ウェーバーの言うように、民主的な外観を持った巨大な団体装置こそ、大衆国家に於ける政党の実態であり、その厳格な官僚化は合理的政党の当然の要請だからである。⁽²⁾かくて教養と財産とによって社会的な尊敬をうけていた名望家による兼職的篤志的な政党活動は、⁽³⁾有給専従官僚群を中核に配置した巨大な団体装置によって技術的統一的に規律化されるに至る。政党は大衆の政治参加を暗示する巨大なパイプとして大衆を暗示し、大衆へのシンボル操作は大量伝達的手段を最高度に動員して、政党の路線を国民的な規模へと次第に定着せしめる。ところで、社会主義政党的のこのような組織の巨大化は、それに比例する社会主義そのものの前進を予約するものであったろうか。われわれは一九一一年ミヘルズが警告した社会主義政党的の「危機」をこゝで想起しよう。パラメンタリズムは得票の爲の最大の努力を政党に命ずる。何故ならば、得票の喪失こそは議席の喪

失と党勢の衰退を直ちに意味するからである。従つて、議会主義をとる限りに於いて、反対政党としての社会主義政党の主要活動は必然的に党员組織の拡大に志向されるとミヘルズは述べる。⁽⁵⁾ ミヘルズの懸念は、このような組織拡大の要請が、夥しい中間層の存在と相俟つて、社会主義政党を次第に保守化することであり、⁽⁶⁾ また、社会主義政党にとつても決して不可避的ではない少数者支配の原則が、「悲しい必然性」として党内民主主義を隠蔽することであつた。⁽⁷⁾ もとより、政党組織の拡大はそれのみで政党機能を遂行するものではなく、組織は当然にリーダーシップを要求しよう。ウェーバーの述べるように、「議会の頭数を揃えた集合それ自体は、統治することも政策を作成することも出来ない」⁽⁸⁾ からである。しながら、大多数の議員はリーダーの為の追従者に過ぎないことを指摘して、少数者支配の原則 (das Prinzip der kleinen Zahl)こそ大衆国家に於いて払拭し得ない鉄則であるとウェーバーが述べるとき、前述のミヘルズの見解と考え併せて、巨大化した政党組織が社会主義の前進を必ずしも意味しはせず、却つて、その組織内に於ける寡頭制への傾斜は、党内民主主義の涸渇と空洞化を招来する危険性あることをわれわれは看取し得よう。この意味で、グラボウスキーの言う幹部政党 (Kaderpartei)乃至は骨核政党 (Rahmenpartei)⁽⁹⁾への傾斜を阻止すべき何等かの組織論の究明は、現代社会主義政党にとつて緊近の急務とされなければならない。

第二に、資本主義の独占段階がもたらした大衆社会の成立と、これに対応する労働者階級の変容とは、社会主義理論そのものを分裂せしめた。かゝる歴史状況に適応せんとする社会民主主義と急進的スパルタクシズムとの分裂こそそれである。すなわち、この期間に於ける独占資本の繁栄は、労働者就中熟練工の生活を均霑し、体制依存的な保守を約束された新中産階級、労働貴族層を次第に群生せしめるに至つた。彼等の期待するところは、もはや完全な社会主義革命ではなく、

現在社会の改良であり社会政策の実施であつた。かくて、原始マルクス主義の革命性は、かゝる圧倒的人口量の噴出によつて稀薄にされ、現実よりの遊離を補間すべき歴史的な課題を荷うに至つた。マルクス主義は、その成立後の半世紀にそれに批判的な幾多の理論と斗争して来た。それは青年ヘーゲル派との斗争であり、プルードンやバクーニンやデューリングとの不断の斗争であつた。マルクス主義は、レーニンの述べるように、二十世紀初頭労働運動の他のいっさいのイデオロギーに対して無条件的な勝利を得つゝあるかのように見えた。⁽¹⁰⁾だが、レーニンがこのように述べているとき、第二インターナショナルの中核であつたドイツ社会主義に於いては、歴史状況に対するリアルな適応を標榜する社会民主主義が、獅子身中の虫の如くマルクシズムの牙城を脅かしていたのであつた。かくて、マルクシズムは遠心力としての社会民主主義と、求心的ベクトルとしてのスパルタクシズムとの分裂を包蔵しつゝ第一次大戦を経過した。

従つて、現代社会主義政党の問題状況は、飛躍的な組織の拡大によつて、分裂し空洞化し官僚化された巨大な寡頭的装置を、如何にして強力で民主的なものに再組織するかと言う新しい組織論の究明によつてのみ収斂され得よう。分裂的な状況にある政党にとっては、分裂の回避は組織統一上の止みがたい要請であり、かゝる要請に馳られて党内の理論斗争が回避せられるとき、党内民主主義は次第に生氣を失う怖れなしとしない。今日、政党及びプレシユア・グループスの存在^{インデール}理由に対する再検討は、議会主義そのものの運命から乖離するを得ない問題性を持つてゐる。議会主義の危機が左右両翼よりの挾撃によつて露呈されるとき、社会主義組織の民主的な運営こそ、民主主義の明暗を決するものと言わねばならない。此の意味で、分裂的な社会主義勢力を統合する思想と行動との組織論は、それがどんなものであれ歴史への回顧と新しい展望の上に見出されなければならない。

このような視点に立つて、本稿ではドイツ社会民主党 (Sozialdemokratische Partei Deutschlands, 以下 SPD と略称する) の悲劇的な変節が奈辺に起因しているを論究する。従って、以下第一章に SPD の分裂と変節が二つの歴史的な時点をピークとして指摘され、次いで第二章に此のような SPD の動向の起因として、組織拡大による同党の変貌と体制化が、その保守化の基盤として検討される。最後に SPD が此のような過程を通じて保守化して行くとき、その組織的な欠陥に対する究明は、同党が何故それを克服できず、またドイツ労働者階級が何故同党を規正し得なかったかと言う問題に達着しよう。政党がその組織的な問題を克服して彼等を指導できず、彼等の期待に応えないとするならば、彼等の最後のアンカー・シートはプレシユアグループスの抬頭に繋がれざるを得ない。此のような視座から、ドイツ労働組合の SPD に対する協働の挫折が、ドイツに於ける統一的社会主義戦線結成の停滞因として第三章で述べられる。

- (1) 松下圭一『大衆国家の成立とその問題性』(思想一九五六年一一号) 参照。
- (2) Weber, *Gesammelt Politische Schriften*, S. 148.
- (3) Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, S. 170.
- (4) Weber, *Gesammelt Politische Schriften*, 423.
- (5) Michels, R., *Zur Soziologie des Parteiwesens*, S. 343.
- (6) *Ibid.*, S. 344.
- (7) Michels, *Political Parties*, P. 390.
- (8) Weber, *Gesammelt Politische Schriften*, S. 167.
- (9) Grabowsky, *Politik im Grundriss*, S. 98.
- (10) Ленин, В. И., *Сочинения*, Т. 4, 1941—5, (邦訳国民文庫版『マルクス・エンゲルス主義』第二冊一二七頁)。

第一章 ドイツ社会民主党の変節

組織拡大によるドイツ社会民主党（SPD）の分裂と変節とは、同党の立場を重大な決断に於いて選択せしめた二つの歴史的な時点をピークとして露呈せられた。その第一はSPDが一夜にして反戦的マルクシズム政党の立場を驕した一九一四年八月四日であり、その第二の時点は第二インターナショナルに於いて指導者な地位を占めていたSPDが、一〇〇万の黨員を擁する第一党として敗戦後の政局を担当した一九一八年十一月である。

一九一四年八月四日、ハーゼを始めとするSPD議員団は、「危急の秋に臨んで祖国を見捨てる訳には行かない」と述べて、帝国議会に於ける戦時公債の提案に協賛した。彼等の意見は、戦争防止に最大の努力を尽したにも拘らず、今やその効果もなくドイツ国民の生命財産は危殆に瀕し、またロシア帝制の勝利はドイツ国民の終焉を意味するから、ドイツ国民の自衛の為に戦時公債に協賛すると言ふにあつた。そればかりか、彼等の中には、クノーやレンシエの様に、此の戦争は勝てそうであり、勝てばドイツのプロレタリアートは裕福になるからと戦時公債に協賛したインペリアリストも居た。SPDの議員一一一名中、戦争に反対したのはメーリング、ローザ・ルクセンブルグ、カール・リープクネヒトなどの僅か四名に過ぎず、その他の議員は熱狂的に戦争に賛成して党大会は戦時公債の協賛を決定した。⁽¹⁾帝国主義戦争に対する反対斗争の指示をSPDに期待していた労働者たちは呆然として混乱した。何となれば、「帝国主義戦争を内乱に転化する」ことを義務づけていたインターナショナル第七回シュツットガルト大会（一九〇七年八月）の決議、及び、この大会の決

議を再確認したバーゼル大会（一九二二年十一月）の宣言を、戦争直前まで繰返し宣伝して来たのは、他ならぬSPDであつたからである。たとえば、戦争勃発一週間前の一九一四年七月二十六日、党機関紙『フォルクス・シュティメ』は、全力を挙げて帝国主義戦争を拒否すること、及びもし不幸にして戦争を拒否できない場合には、少くとも此れを最後の戦争に代え、革命に転化すべきことを訴えている。その当否は暫く措くとしても、「祖国を持たない」マルクシズムの基本理念や、シュツットガルト、バーゼル両大会の反戦決議が、第二インターナショナルの中核であるSPDによつて弊履の如く捨て去られたことは事実であつた。この城内平和（Burgfriede）の宣言を機として、SPDはそれまでの反対政党の立場を一擲し、次第に体制内政党への過程を辿るに至るのである。SPDが次第に体制内へと組入れられ、一九一八年十一月ドイツ帝制瓦壊の後を受けて政権に進出するに至る過程に於いて、戦時公債の協賛に反対したローザ・ルクセンブルグやリープクネヒトなどの急進派は、一九一六年一月スパルタクス団（Spartakusbund）を結成し、さらに翌一九一七年四月左翼中央派を糾合してドイツ独立社会民主党（Unabhängige Sozialdemokratische Partei Deutschlands、以下USPDと略称する⁽³⁾）を形成した。彼等は十一月革命に至る迄戦争反対と革命の為の斗争に挺身し、彼等のアヂは相当の広がりを見せたが、彼等は未だ殆んど大衆的な基盤を持たない、いわば「手足のない頭」に過ぎず、戦争の勃発以来SPDの主流であつた中央多数派の勢力を未だ覆えすには至らなかつた。⁽³⁾かくて、ドイツ社会主義は戦時公債問題を契機として決定的に分裂し、急進的スパルタシストと多数派社会主義者との対立の儘に十一月革命に突入するのである。

従つて、十一月革命が勃発したとき、ドイツの統一的社會主義勢力は何等行動の準備をとつて居らず、彼等は分裂し混亂していた。ストレーベルの言うように、此の革命は旧政治体制に反対する国民多数の意識の高まりに依つてではなくし

て、寧ろドイツ帝制の支柱たるドイツ軍隊の崩壊によって惹起せられたのである。⁽⁴⁾ この意味で、十一月革命は革命と言うよりも寧ろ崩壊 (Umsturz) と呼ばれるにふさわしいのであるが、この革命を「歌をもたない革命」に終らしめた第一の原因は、前述のドイツ社会主義の分裂とSPDの変節であつたと言えよう。すべての戦争は、現存国家秩序の負荷試験 (Belastungsprobe) である。そして、此のことはプロイセン帝制の如き権威国家に於いて特に当てはまる。何故ならば、そのような国家ではその政治体制の正当化 (Legitimierung) をよしんば憲法で規定し得ても、本質的な国民代表制と国民の利益とに依拠することを第一義とはせず、超政治的な神格化を前提とする伝統に、その特異的な権力諸関係を依存させているからである。未だ半絶対主義的なドイツ帝制の權威手段を以てしては、大衆デモクラシーと国民主権の時代に於ける国民の諸力を、最も活動的に結集することは望み得なかつた。⁽⁵⁾

一九一八年秋、ドイツ陸軍の敗北は決定的となつていた。そして、戦争を継続することは、ウイルソンとの間に始められた休戦交渉を少しでも有利に妥結する「無駄な努力」にしか過ぎなかつた。⁽⁶⁾ ドイツ軍の戦死者は一〇〇万に達し、その他にもはゞそれと同数の廃兵があつた。灰色に塗りつぶされた長い銃後の国民生活は、戦争が恐るべき消耗と戦慄すべき人間性の庄殺でしかないことを、まさまじとドイツ国民に思い知らせた。かくて、彼等の間に休戦を望む声が次第に高まり、目に見えない糸に繋がれてドイツ全土を行つたとき、平和運動が国民的な規模で広がり始めたのであつた。だが、このような社会的緊張の解決は、帝国主義戦争の続行によつて完膚なき迄にその弱点を暴露したドイツ帝制の、能く遂行しうるところではなかつた。しかのみならず、一九一七年に於けるロシア革命の成功は、ソビエト型社会主義革命がドイツでも実現しうることを、ドイツ急進派に幻覚させ、彼等をして労兵協議会^{ライプ}の樹立を理想たらしめた。事実、十一月

四日、キールに於いて暴動が勃発したとき、先ず樹立されたのは労兵協議会であつたし、野火の如くドイツ全土にひろまつた革命は、六日迄にハンブルグ、リューベック、ブレーメンなどの北ドイツ諸都市にレーテを樹立し、また、八日迄にはドレスデン、ライプチヒ、フランクフルト・アン・マイン、ミュンヘンなどの南ドイツ諸都市に、労兵レーテが相次いで樹立された。そしてこのようなレーテを樹立したのは、主としてUSPD左派又はオプロイテの指導下にある人達であつたのである。⁽⁷⁾一八七二年六月共産党宣言のドイツ語新版への最後の序文に於いて、マルクスとエンゲルスとは「労働者階級はできあいの国家機関を単にその手に握り、それを自分自身の目的の為につかうことはできないことを、とくにコンミュン⁽⁸⁾は証明した」と述べている。マルクスの見解は、クーゲルマン宛の彼の書翰が示すように、国家機関は破壊さるべきであり、労働者は単にそれを奪取するに止つてはならないと言うにあつた。⁽⁹⁾ しかれば、破壊された国家機関は何を以つてとりかえられるか。レーニンによれば、議会ふうな団体ではなくて、同時に行政府でもあり立法府でもある行動団体としてのコンミュンこそ、それであつた。⁽¹⁰⁾ かくて、ロシアに於いては講和締結の為に選ばれた臨時政府が押しのけられ、すべての権力を集中した労兵協議会が民主主義と社会主義とを実現する唯一の機関となつた。だが、ロシアに於けるレーテの経過については、不明確で矛盾だらけの報導がドイツにはもたらされた。それは明確に把握しようようなはつきりした映像ではなかつた。「地球から恐ろしく離れているので、その光が地球に届くときには、疾くの昔になくなっている星があると天文学者は言うが、そのような星がロシアのレーテなのだ」とUSPDの一議員は当時述べているが、ロシアのレーテ思想がドイツに導入されたのは十一月革命の二ヶ月前であり、ドイツの労働者大衆は此の新しいボルシェビキ思想を未だ熟知するだけの期間を持たなかつたのである。⁽¹¹⁾

のみならず、ロシアの場合と決定的に事情を異にした点は、ロシアでは革命によって帝制が打破されたのに対し、ドイツでは十一月革命が勃発したとき既に社会主義を標榜するSPDが政局を担当していたことである。一九〇七年のSPDは前述の如く「帝国主義戦争を内乱に転化する」ことを義務づけたシュツットガルト大会の花形であつたが、一九一八年のSPDは今や完全な体制内政党と化し、ドイツ帝制の清算人として、欲しない「革命」を大衆の手前だけ「採用」する「幸福な」指導者にしか過ぎず、⁽¹²⁾国民的な平和へのエネルギーを嚮導して社会主義革命へと結晶させることなど到底期待しうるところではなかつた。このことは戦争の後半の二年間に於いて漸く激しくなつた革命のアデターションが、SPDの指導によるものではなかつたこと、及びその主たる中心がレーデブル、エミル・バルト、R・ミュラー、ドイミツヒなどのUSPD左派系の人達や、リープクネヒト、ルクセンブルグ、ヨギヘスなどのスバルタクス・グループであつたことによつても説明される。就中、バルトやドイミツヒなどの指導するオプロイテこそ最もアクチブなアデターであつたが、実際の革命はこれら革命グループの影響外のところで惹起されたとも言えるのであり、⁽¹³⁾SPD多数派にとっては、それは「起された革命」でしかなかつたのである。十一月革命がSPD多数派の意図から如何に遠いところで「起された」かは明白であらう。SPDの指導者として政局を担当したシャイデマンは言う。「一九一八年秋の歴史の嵐が旧政権を覆し、誰も楯をとるものが居なかつたので、われわれが出て行つた迄だ。強盗が略奪でもするかのように、われわれが政権を獲得したと言うような考が世上にひろがるのを、われわれは片時も許すことは出来ない」と。⁽¹⁴⁾スバルタクシズムへの拒否とナショナリズムへの近接の中に十一月革命に突入したSPDにとつて、当時行い得たことはたゞブルジョア社会の維持であり、スバルタシストの武力鎮圧であり、軍隊の再建であつた。⁽¹⁵⁾そして、革命の影響を最少限に留めようと言うのが

SPDの一貫した態度であつた。⁽¹⁶⁾ SPDが、公式的に掲げた政綱はもはや空辭でしかなかったのである。

欧州社会主義運動の先驅的な指導者として革命的な綱領を掲げていたSPDが、体制内政党への移行と共にその革命性を喪失した事情は、一体何を物語るものであろうか。十一月革命に於けるSPDの消極性はその根底に於いて一九一四年の変節と繋るものがある。マルキストの言うように、それがよしんばSPD幹部の裏切りの所為であるにしても、そのような裏切りが何故に行われ得たかと言う事情の究明は、依然として問題性を持つものと言わねばならない。人間の行動は彼がそれを意識すると否とに拘らず本来組織関係的である。人間は今日組織なくして生活し得ない⁽¹⁷⁾、彼の行為は決して没社会的恣意的な彼の意志決定の所産ではない。とすれば、SPD指導者たちの変節を可能にした組織上の欠陥に対する究明は、単に党幹部の「裏切り」として解消されるには、余りに高価な問題性を持つものと言わねばならない。もとより、組織論の究明は組織内に於ける個人の責任を不当に軽視して、それを組織上の欠陥に転嫁するものであつてはならない。個人の責任が喚起されるからこそ、組織的な欠陥が克服されなければならないのである。このような視座から、SPDの保守化を規定したその組織論的な陥穽が奈辺に存在し、そしてそれが何故克服され得なかったかを、組織拡大過程にあるドイツ社会民主党史に求めて見よう。

- (1) Kuzynski J., Der Ausbruch des ersten Weltkrieges und die Deutsche Sozialdemokratie, 1957, S. 94.
- (2) Prager, E., Geschichte der U. S. P. D., S. 132.
- (3) Bergersträsser, Geschichte der Parteien in Deutschland, 1955, S. 231.
- (4) Ströbel, German Revolution and After, P. 7.
- (5) Bracher, K., D., Die Auflösung der Weimarer Republik, zweite aufl., S. 15.

- (9) Pinson, *Modern German*, P. 353.
- (7) ミュンヘンの十一月革命について、Beyer, H., *Von der Novemberrevolution zur Räterepublik in München*, 1957, が詳しい。
 尚十一月革命を研究したものと、Müller R., *Von Kaiserreich zur Republik*, 2 Bd., は既に定評があるが、最近の研究成果
 として、Deutsche Akademie der Wissenschaften Zur Berlin, *Revolutionäre Ereignisse und Probleme in Deutschland während der*
Periode der Grossen Sozialistischen Oktoberrevolution 1917/1918, 1957, はドイツ各地の十一月革命の研究を集録している。
- (8) Marx K., Engels F., *Manifest der Kommunistischen Partei*, (邦訳、岩波文庫版、八頁)。
- (9) マルクス・エンゲルス選集、第十一巻、二九五頁。
- (10) Ленин В., И., *Государство и революция*, 1917, (邦訳、国民文庫版、六九頁)。
- (11) Torgin W., *Zwischen Räte-diktatur und sozialer Demokratie*, 1954, S. 28.
- (12) Pinson, op. cit., P. 351.
- (13) Ibid., P. 354.
- (14) Berlau, *The German Social Democratic Party 1914—1921*, 1949, P. 215.
- (15) Pinson, op. cit., P. 355.
- (16) Berlau, op. cit., P. 214.
- (17) Michels, *Zur Soziologie des Parteiwesens*, S. 24.

第二章 組織拡大によるドイツ社会民主党の変貌過程

(1) 統一的社会主義理論の分裂

一八六九年結成された社会民主労働党は、一八七五年ゴータに於いてラッサール派と合同し、ドイツ社会主義労働者党

(Sozialistische Arbeiterpartei) と改称し、更に一八九〇年のハレ党大会に於いてドイツ社会民主党 (SPD) をその正式の党名に採用した。そして、翌一九〇一年カウッキの起草になる新綱領を SPD はエルフルトに於いて採決した。SPD がラッサリズムからの伝統的な繋縛から綱領の上で自由になり、マルクス主義政党としての旗幟を明確にしたのはこのエルフルト綱領に於いて始めてであつた。この綱領はその前半に資本主義経済の発展法則を述べて生産手段の社会化の必要をかなり革命的な論調で綴っている。ところで、その具体的な実行綱目を掲げる此の綱領の後半に眼を転ずると、前述の革命的なトーンは一変する。そこに見られるのは改良主義的な項目の羅列に過ぎない。もとより、社会主義鎮圧法の廃止された直後のドイツであつて見れば、その表現に慎重な注意が払われたことも理解できなくはない。しかしながら、此の綱領の前半と後半とに示された革命性と現実主義との分裂と離反は、その後のドイツ社会民主党史をいみじくも象徴する潮流であつた。第一章に述べた二つの時点をピークとする SPD の変節と分裂とは、このような革命性とリアリズムとの分裂、すなわち、空語化していた綱領の革命性と SPD の現実との離間によつて顕現せられたものと言えよう。それは「綱領政党」(Program-parteien) の悲劇でもあつたろう。その綱領を直ちに実現する可能性のない状況において、綱領は屢々政党の立つ世界観の宣言的な表明である⁽¹⁾。従つて、エルフルト綱領がマルクス・エンゲルスの革命的な原理を布衍したに止まり、権力論乃至は組織論の具体的な展開に裏付けられていなかったとしても、世界観政党から大衆政党への移行過程にある SPD にとっては止みがたい齟齬であつたかも知れない。だが、このような綱領の革命性とリアリズムとの離反が、綱領の空語化と党生活の現実埋没化を、結果的にはパラドキシカルに容認することゝなつたのである。

SPD に於ける革命性とリアリズムとの不整合を是正せんとしたのはベルンシュタインであつた。彼は同党の理論的な

基礎が尖鋭に過ぎ、現実的にはその実現を冀求するものが少いことを看取したのであった。一八九九年彼は『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』(Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie)を公刊し、ブルジョア民主主義革命の達成こそ社会主義実現の「前提」であり、合法的な議会主義が擁護さるべきことをその中で訴えた。⁽²⁾このベルンシュタインの見解は、「ブルジョアジーと政府とはプロレタリア党の非合法的な行動よりも合法的な行動を、即ち、暴動の結果よりも選挙の結果の方を遙かに恐れる様になった」と述べて、階級斗争の諸条件の初期のそれからの本質的な変化を指摘したエンゲルスの見解⁽³⁾(一八九五年の『フランスにおける階級斗争への序文』を擁用するものであったが、俄然党内よりの大反論をひき起し、一九〇一年のリューベック党大会次いで一九〇三年のドレスデン党大会に於いて拒否せられた。反論の急先鋒はローザ・ルクセンブルグ(左派)であり、カウツキー(中央多数派)であった。ローザ・ルクセンブルグはベルンシュタインの合法的議会主義を痛撃して次の如く述べる。

「ブルジョア議会主義の鶏小屋をもって、資本主義的社会形態から社会主義的社会形態への移行という世界史的变化が行われるべき適切な機関と考える仕事は、ベルンシュタインの爲にとっておかれた」⁽⁴⁾と。労働者階級の目的は「すべてこれまでの社会組織の暴力的な破壊によってのみ達成される」と言う『共産党宣言』におけるマルクスとエンゲルスとの見解によって、彼女は「ブルジョア的議会主義」を峻拒したのであった。⁽⁵⁾

思うにドイツ社会主義勢力をカッタクロスする思想の組織論が此の時冷静に見出されなければならない筈であった。その試みがネグレクトされるとき、現実より遊離した理論の革命性は、屢々アイデンティを確認する為のイヤ・マークと化し、理論斗争の展開は必ずしもその有効性を保証しなくなるであろう。およそ理論は現実によって底礎され検証され

激突されてこそ發展するものであろう。革命理論たりとも例外ではない。一九五七年コンファースは述べる、「ソヴェトの道、ロシア革命がたどった道は、社会主義への唯一の道ではない。それどころか、この道はひとたび踏まれた以上は二度と踏みにおよばないものである」⁽⁶⁾と。ドイツ社会主義もその独自の道をこのとき見出すべきであつた。十一月革命が勃発したときドイツ各地に相次いで樹立されたロシア革命型協議会制度が、次第に孤立し遂に屈服せられるに至つたのは、ドイツに於ける統一的社會主義戰線の結成がなくて挫折し、その独自の道を見出し得なかつたことに少からず依拠してゐたと言えよう。

「西ヨーロッパは理想こそ高いが、本心はすこぶる實際的であり俗物的である。西ヨーロッパは反ブルジョアを信条としながら、本質的にはブルジョア的であるのに対して、ロシアはブルジョア革命を企図している場合でも反ブルジョア的である」⁽⁷⁾

皮肉にもボルケナウの此の言葉こそ、その綱領の標榜する革命性にも拘らず、敢なくも消極的であつたSPDを、レーニンの卒いるロシア・ボリシエビキの勝利に対比するものであるが、此の言葉の中にわれわれはドイツの政治的カルチャーのドイツ社会主義への強力な規整を看取し得よう。ドウベルジュの言うように、国家はその構造に似せて政党を作るものとすれば、SPDを規定したドイツ的な要因は何であつたろうか。生産者の協同組合が社会主義の基礎となるべきであり、国家が援助しなければこのような協同組合はできないと主張するラッサリズムは、由来伝統的なドイツ社会主義の底流であり、エルフルト綱領が文字の上でそれからの呪縛を脱却した後も、依然として根強くドイツ社会主義に盤踞してゐた。そして、ラッサールに戻らんとするナショナルセンチメントの潮流は、前述した修正主義の潮流と並んで、その結

成から一九一〇年頃に至る迄のSPDを支配した二つの主要な潮流であつたのである。⁽⁸⁾ パーローによれば、国民の福利に対する顧慮は常にSPDを動したモチブであつた。アンチ・ナショナリズムとインターナショナリズムとはドイツ統一以前よりの社会主義者の基本的な態度であり、労働者は祖国を持たず鎖以外に失うべきものを持たないと言うスローガンも、当初は実感を持つて労働者に受け容れられた。だが、一九一四年に至る迄の半世紀は労働者に「国家」を意識させる多くの条件を作り出した。それらは、教育の普及であう兵役の義務であり、多くの社会立法や選挙権の拡張であつた。⁽⁹⁾ かくて、理論の上でマルキシズムのインターナショナリズムに牽引されるとき、ドイツ労働者はラッサールの国家観との矛盾に益々自己分裂を感じなければならなつた。⁽¹⁰⁾ ドイツ労働者がこのような状況にあるとき、組織拡大によつてSPDが次第にナショナリズムへと傾斜したのも不思議ではない。そればかりか、一九一四年八月の変節が示すように、国民的な問題に關してのSPD多数派の見解は、寧ろブルジョア政党的それに近かつたとさえ言われる。⁽¹¹⁾ SPDが軍隊と官僚とに次いで最もプロシア的組織であると言われ、⁽¹²⁾ 「愛国者の党」(Party of Patriot)と呼ばれる所以もここにあつたろう。かくて、SPDのこのような動向が、ナショナリズムとソウシャリズムとの鋭い分裂^{シスム}を黨員にもたらし、その結果SPDの理論的な対立を益々深化させたのである。主流であつた社会愛国主義者(Sozialpatrioten)と、社会平和主義者(Sozialpazifisten)及び社会革命主義者(Sozialrevolutionären)との対立こそそれであつた。そしてこれらの諸勢力を統合する思想の組織論は遂に見出されなかつた。一九〇五年におけるロシア革命は、二十世紀的なプロレタリアート革命の武器として政治的大衆ストライキを戦術化せんとする革命主義者を党内に進出させたし、一九〇七年の選挙におけるSPDの失敗は党内へのミリタリストの抬頭を可能にした。そして、コロニアリズムと戦争とをめぐる政争は、SPDの左右兩極への分裂を前提

としてのみ推進され、このような状態から蟬脱するような決定は何ら行われ得なかった。⁽¹³⁾ SPDがその組織を飛躍的に拡大したのは、このような分裂的な状況に於いてであった。

(2) 数の増加に依存した組織論の悲劇

i 組織拡大による保守化

SPDはその前身である社会民主労働党の結成以来労働者階級の間に着実にその勢力を挙げ、一九〇三年には三〇一万

SPD 党員の増加 (1906—1913)

年 度	党 員 数	増 加 率
1906	384327	
1907	530466	38.0
1908	587336	10.7
1909	633309	7.8
1910	720038	13.6
1911	836562	16.1
1912	970112	15.9
1913	982850	1.3

(註) Protokoll über die Verhandlungen
des Parteitages der S. P. D.; 1913,
S. 10.

SPD 得票数の増加 (1871—1920)

年度	得 票 数	得 票 率	議席数
1871	113,048	2.91	2
1874	350,861	6.76	10
1877	493,258	9.13	12
1878	437,158	7.59	9
1881	311,961	6.12	13
1884	549,990	9.71	25
1887	763,128	10.21	11
1890	1,427,298	19.75	36
1893	1,780,989	23.21	48
1898	2,113,073	27.23	56
1903	3,010,472	24.0	81
1907	3,259,020	24.4	43
1912	4,250,329	34.7	110
1919	11,509,048	37.9	165
1920	5,614,456	21.6	113

Berlau, op. cit., P. 348.

票(得票率二四・四%)の投票を獲得、⁽¹⁵⁾さらに一九〇七年には三二六万票を獲得して総数五三万に及ぶ党員をその組織下においた。因みに、一九〇六年より一九一二年に至る六ヶ年のSPDの党員増加率は平均一七%であった。SPDはその

後も順調に組織を拡大し、一九一二年には四二五万票（得票率三四・七％）を獲得、議席一一〇を擁する第一党に進出した。

だが、このような飛躍的なSPDの組織拡大は、数の示すような社会主義そのものゝ前進を必ずしも意味しはしなかった。それは数の増加に依存した組織論の悲劇とも言ふべきであつたろうか。SPDにとつて黨員と得票との増加は、その革命性を喪失せしめる結果となつたのである。権力への参加は常に政党を保守化すると言ふミヘルズの言葉が此処で真に皮肉なニュアンスを伴つて想起されよう。⁽¹⁶⁾ 当時のドイツ帝制の下では帝國議會はユンケル專制の無花果の葉に過ぎず、實質的には何等の権能をも与えられて居ない「第五の車」に過ぎなかつたのであり、議會に許されていたのは予算の協賛権があるのみであつた。従つて、このような権力状況の下でSPDが議會斗争の為に組織を拡大したところで、彼等本来の仇敵の死命は未だ制せられ得ると言うものではなかつた。権力論を欠いた組織論の悲劇がこゝにあつた。議席の増加は議會主義政党がその政策を実現する可能性を濃くするものではあつたろう。SPDの活動は現実において黨組織の拡大と得票の増加に少なからず志向された。かゝるパラメンタリズムからの要請は、その安易な組織論を媒介項としてSPDを次第に保守化したのである。何となれば、社会主義に対しても自由主義に対しても容易に帰属を明らかにしない夥しいドイツ中間層の存在は、組織前に於いても組織後に於いても、SPDの革命性を修正せしめる主要な原因であつたからであり、⁽¹⁷⁾ 南ドイツの独立自營農民がこれと同様の修正をSPDに迫つたからである。⁽¹⁸⁾ 選挙に於ける勝利こそは議會主義政黨の必然的な目標であるが、その魅惑が今やSPDを偽瞞政治（Vertuschungspolitik）へと傾斜させるに至つた。⁽¹⁹⁾ 組織拡大を至上の使命とする黨機關の要請は、党内の統一と抗争の回避であり、純理論的な斗争はあらずもがなの負担として次第に

忌避されて行つた。⁽²⁰⁾従つて左派からの批判が出されるとき、組織統一の要請は党幹部を次第に保守化した。このような情勢こそ、一九〇五年から一九〇九年に至る安定期にSPDから左派を駆逐し、リホームистの圧倒的な進出を打刻した要因であつた。⁽²¹⁾

ところで、党組織へのリホームистの大量の進出は、その運命をトすべき他の重要な影響をSPDに及ぼした。党組織の官僚化とそれに伴う技術主義への傾斜こそ、それであつた。SPDがトップの執行部から下部の工場指導者や地域指導者^{ショッパリアーグズ}に至る迄の巨大な官僚制によって構成されていたことは周知のところであるが、そのような官僚装置は前述の安定期に礎石を設定し構築せられたのであつた。⁽²²⁾

ii 集権的官僚制の形成

一九〇五年に至る迄は有名なSPDの官僚組織も未だ形成されては居なかつた。中央でも地方でも職員の規律は未だ確立されて居らず、党のリーダーシップは帝国議会議員たちの掌中にあり、党大会の選出した執行部員たりとも議員の了解なしに重要な決定を行い得ない実状であつた。そして行政職員に対する政治家議員の優位に彩られていた執行部の主要な関心は、議会と党紙によるアヂに限局されていたのである。一八九〇年代の党執行部十二名中、行政職員は僅か三名に過ぎない。従つて地方支部からの報告をうける機関もなく、党の財政的な基礎も不安定であつた。⁽²³⁾一八九〇年代の終りになつて高まり行く党務の遂行に対する要求が行政職員の執行部への進出を促進した。一九〇〇年執行部は七名の本部(議長二名、書記二名、会計一名、選挙委員二名)と、それを監視する五名の管理委員会とに分離した。⁽²⁴⁾そしてこの管理委員会の成立こそ、行政職員が議員勢力から独立した分岐点であつたのである。かくて一九〇六年に至る迄SPD執行部に於け

る行政職員の比重は次第に増し、彼等による党務の運営が日常化して行くのである。⁽²⁵⁾

中央執行部に於ける行政職員の進出が著しくなったとき、SPDのローカル・レベルはどのように構成されていたであろうか。一八九〇年代を通じてSPDは社会主義鎮庄法の復活を怖れていた。従つてSPDの下部組織はルーズにされ、各地方支部は夫々の実情に応じた補修活動^{（おぎなひ）}にその仕事を終始させていたのである。そして中央執行部との連絡を使命として選出される委員（Vertrauensmann）だけが、SPDの持つ唯一の統一機関であった。しかのみならず、一八九九年に至る迄は州境を超えた組織の拡大は禁ぜられていたから、各地方に割拠した支部の一体性は真に稀薄であり、一九〇〇年に再確認された連絡委員（Vertrauensmann）の中央機関性も、彼等が職員として地方支部に容喙することは認めないという限定を持っていた。⁽²⁶⁾

だが、選挙活動の高まり行く必要性は、こゝに世紀の転換点を起点として地方組織の対選挙用の再構成を促進するに至った。SPD各地方組織の選挙区組織（Wahlkreisverein）への再構成こそ、それであった。由来リホームリスト勢力の強力であった南ドイツに於いて、特に強力にこのような再構成が推進されたことは興味深い。一九〇〇年にはウエルテンベルクに、また一九〇五年迄にはババリア、オルデンブルグ、シュレズウィッヒ・ホルシュタイン、アルサス・ローレンヌの各地に、此のような選挙区組織が結成された。

一方、一九〇三年の帝国議会選挙におけるSPDの飛躍的な進出は、選挙民を更に有効に組織化する必要をSPDに強く訴え、同年のドレスデン党大会において規律ある党組織の確立が要望されるに至った。かくて、一九〇四年から翌年にかけての党規約改正運動はイエナ党大会（一九〇五年）に於いて結実し、中央集権的な官僚制がSPDの品質保証^{（ホイル・アイク）}として

規律化されるに至った。新規約の下に選挙区組織が党の基本的な単位とされ、その役員は党员・財政・支出及び活動につき党執行部に報告する義務を負わされ、上に開かれた責任の体系がSPDの集権的な官僚制に縦貫した。⁽²⁷⁾

iii 技術主義的官僚制の抬頭

党組織の集権化が此のように進むとき、SPDの新しい傾向は技術主義的官僚制の抬頭であつた。組織拡大に伴う党務の激増が有給専従職員の党組織への進出を助けたことは前述の如くであるが、かくて革命的情熱的な政治家役員は、中立的で冷徹勤勉な才能家を資格とする新行政官僚群によつてその地位をとつて代られた。労働者がゲリラ戦をしていた時代は過ぎ去つた。こゝかしこで独占資本に潤沢された労働貴族層が抬頭し、企業家の団体は益々その組織を固めていた。今や労働者は組織なくては生存し得ない。より巨大でより、財政の豊かな集権的組織であり、同時に常に戦い得て討論しうる組織の必要が、独占資本の木枯しに付むドイツ労働者の胸をひしくと打った。⁽²⁸⁾従つて、こゝで要求されるのはもはや情熱的なアヂテーターの正義感ではなく、職業的な党運営に於ける秀れた才腕であつた。そして、このようなりホームスト新官僚の原型こそ他ならぬエーベルトであつたのである。一九〇六年彼がベルリンの党本部に着任したとき、彼は事務所が余りにビジネス・ライクでないのに驚かされた。そこには電話もタイプライターも古い党の記録もなかった。彼の仕事は三つあつた。その一は会計の補佐であり、その二は党紙の監督であり、その三は地方支部からの報告を統計資料に作成することであつた。そして、第一と第三の仕事を通じて彼は地方組織との接触をもち、その精通が彼の党務の掌握を約束した。彼が来て二年以内に党の地方組織の骨組は殆んど完成した。当時SPDの地方組織はその有給職員を指名し得てもその最終的な決定は党執行部に仰がなければならなかつたのに反し、党執行部からの地方組織職員の任命は一九〇四

年のプレーメン大会の認めるところであつたので、一九〇八年迄に党執行部はその願使に応ずるヒエラルヒーを殆ど選挙区に伸長し、ドイツの三九七選挙区中僅か二二選挙区が正式のSPD組織を持たなかつたに過ぎない。

かくて、党組織の拡大は党内における原理的な理論斗争を次第に不可能にし、党務は有給専従事務官僚によつて統一的に処理されるに至つた。彼等の日常活動はもはやディカルな革命のアヂではなく、党費の徴収や党紙の拡張やホームマルな文書活動に固定され、彼等はそれらを技術的に有能に処理しさえすれば良かったのである。そしてこのような技術的な要請が左右の抗争からの中立を彼等に標榜せしめ、彼等の非政治主義を刻印づけたのであつた。⁽²³⁾ 党組織の統一的な運営を望む彼等リホームリスト官僚は、中立を標榜する彼等の技術的な行政が自己運動を展開するとき、相対的には党の保守化を招来していることに気がつかなかつたのである。拡大された組織は小さかつた組織論上の欠陥をも同時に拡大する。世界観と厳格な階級関係 (strict class alignment) との強調は由来ドイツ政党の特徴であるが、⁽³⁰⁾ 世界観政党として出発したSPDが、かくて次第に組織内の理論斗争を回避し、空洞化した党組織を事務的に運営して行つたとき、上へのみ向けられた責任のヒエラルヒーは組織ごと容易に反転される可能性さえ持つていた。主義は単なる空辞にしか過ぎずコンセンサスの為の勇しい掛声に墮してゐたからである。かくて、一九一四年八月及び一九一八年秋のSPDの変節は余りにも当然に顯示せられた。それは数字の増加に幻惑されたSPD組織論の悲劇であり、統一的社会主義理論の発見に挫折した官僚技術主義のもたらす当然の帰結でもあつた。一九一八年十一月SPDは前述の如く期せずして政権に進出した。だが、このように官僚化したSPDも、その行政技術の操作に於いてプロイセン官僚を凌駕するものではなかつたのである。彼等に対する劣等感は絶えずSPD官僚を苦惱させ、行政技術への未熟は政権についたSPDを常に掣肘した。経験の足りない

この新しい主人に対して、モナークისტは単にリップ・サービスだけをすれば良く、国家機関は依然としてプロイセン官僚の掌中にあった。⁽³¹⁾

このように見てくるとき、一九一〇年代のSPDが十九世紀的な政党機能を喪失し、巨大な得票機関にしか過ぎなかったことが明白となるであろう。より、巨大でより、財政のある集権的な政党としてのSPDは、労働者たちが求めた様な常に戦い得て常に討議しうる組織ではなかった。かくて、本稿のアプローチは社会主義の「真の学校」と呼ばれ、労働者階級の最後の拠点である労働組合の動向に、当然向けられて行かなければならない。ドイツ労働組合が前述のSPD組織論の欠陥を克服し得なかったのは何故であろうか。以下に紙幅の許す限り追究したい。

- (1) Finer H, *Governments of Greater European Powers*, P. 600.
- (2) Bernstein, *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*, 1923, S. 230. (松下訳『ベルキンズムの改造』世界大思想全集第四七巻)。
- (3) マルクス・エンゲルス選集、第五巻、一六九頁。
- (4) ローザ・ルクセンブルグ『社会改良か革命か』四六頁。
- (5) フレット・エルスナー『ローザ・ルクセンブルグ』(杉山訳、三七頁)。
- (6) コントフォース『社会主義革命の理論について』(石堂編『現代革命の展望』一二七頁)。
- (7) Borkenau F., *The Communist International*, 1938, P. 22.
- (8) Berlau, *German Social Democratic Party 1914—1921*, 1949, P. 67.
- (9) *Ibid.*, P. 68.
- (10) Heidegger H., *Die Deutsche Sozialdemokratie und der National Staat, 1870—1920*, S. 66.
- (11) Berlau, *op. cit.*, P. 196.

- (12) Neumann S., *European Political System* (edited by Cole), P. 304.
- (13) Schorske, *German Social Democracy 1905—17*, P. 88.
- (14) Berlau, op. cit., P. 69.
- (15) Berlau, op. cit., P. 348 の掲げたる SPD の得票は三〇一〇四七一票であり、Hirsch und die Wahlen zum Deutschen Reichstage, 1912, S. 23. (篠原『ドイツ革命史序説』所引) の有効得票三〇一〇七七一票との間には若干の喰違いがある。
- (16) Michels, *Zur Soziologie des Parteiwesens*, S. 343.
- (17) Ibid., S. 344.
- (18) Schorske, op. cit., P. 7.
- (19) Michels, op. cit., S. 344.
- (20) Ibid., S. 352.
- (21) Schorske, op. cit., P. 127.
- (22) Ibid., P. 116.
- (23) Ibid., P. 117.
- (24) Meining F., *Geschichte der deutschen Sozialdemokratie 1897—1898*, (塚本訳『ドイツ社会民主党史』四、三六九頁)。
- (25) Schorske, op. cit., P. 117.
- (26) Ibid., P. 120.
- (27) Ibid., P. 121.
- (28) Prager, *Geschichte der U.S.P.D.*, S. 15.
- (29) Schorske, op. cit., P. 127.
- (30) Neumann S., op. cit., P. 295.
- (31) Ibid., P. 304.

第三章 ドイツ労働組合における中立主義理論の陥穽

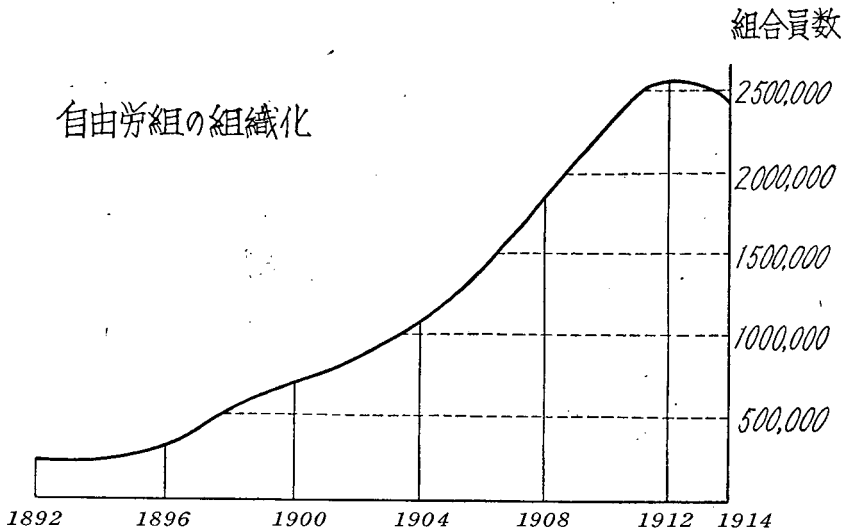
ドイツの労働運動は余りにも政治に頭をつっこみ過ぎたと言う評言に依えて、シュトゥルムタールはその悲劇が政治性の過剰にあったのではなくして、反対にその政治意識の不十分さ、及びその政治的責任の不履行に起因すると指摘する。⁽¹⁾

二十世紀初頭のドイツ労働組合には三つの主要な系統があった。その第一はドイツ労働運動の本流と見られる自由労働組合 (Freie Gewerkschaften) であり、その二は労資協調的なヒルシ・ドゥンカー労働組合 (Hirsch-Dunckersche Gewerkschaften) であり、その第三はカソリック系のキリスト教労働組合 (Christliche Gewerkschaften) である。しかしながら、本章はSPDの組織論的な陥穽を克服し得なかったドイツ労働組合の非政治主義の究明を主眼とするが故に、以下ドイツ労働運動の主流であり社会民主党系の組合である自由労働組合にのみ問題を限定して、その非政治化の起点となった一九〇五—六年を論じて見よう。

当時におけるドイツ労働組合の構造的な特徴はその産業別組織と嚴重な中央集権制とにあった。即ち、その下部組織の使命とするところは、(1) 組合費の徴収であり(2) 組織の拡大であり(3) ストの決行であるが、その使命の遂行に当たっても下部組織は組合指導部への服従を嚴格に要求され、徴収した組合費を支配する権限すら与えられて居らず、また組合指導部の同意なくしてはストを決行することも出来なかった。下部組織は徴収した組合費を指導部に納入して一定の予算を受取り、その支出につき指導部から審査されていたのである。⁽²⁾ 自由労働組合がこのような集権的な下部組織に支えられたとき、そ

の財政規模の拡大と組合員の組織化が如何に急速であつたかは疑うに足りない。二十世的に於ける生産の社会化が巨大な圧倒的人口量の噴出をもたらしたことは前述の如くであるが、集権的な労働組合の下部組合こそ、このような労働者の大群を組織化する組合の取入口であつたのである。事実一八九一年から一九一三年に至る迄に、自由労働組合はその組合員数を八倍に拡大し、その収入に至つては七一倍、その財産に至つてはこの期間中に実に一九二倍に増加している⁽³⁾。

このような組合組織の拡大がその官僚化を結果したことはSPDの場合と同様であつた。シュレジンガーの言うように自由労働組合はその成員こそ三倍であつたが、事実上はSPDと同じグループによって構成されていたのであり、今や労働運動のあらゆる団体、すなわち党や労働組合や消費組合の中に、官僚群は労働者の生活の向上を促進する為の専従者として進出を始めていたのである⁽⁵⁾。かくて、専従組合官僚群の抬頭は、一九〇五年レーニンをして歎かしめた如く、マルクシズムの伝統の最も強力なドイツ自由労働組合においてすら、イギリス風の純粹労働組合主義^{トレド・ユニオニズム}を猖獗せしめるに至つたのである⁽⁶⁾。従つて、彼等の意図するところは平和的な議會主義と經濟一本槍の斗争とであり、組合の日常活動はその成員たる組合員の經濟生活の向上に志向された。そして、共済組合充実の理想はその資金の流用に於いて争議行為に優先し、組合の非政治主義はトレド・ユニオニズムの中に貫徹されるに至つた。豊かな資金があつたからこそ、深刻な争議行為はドイツ労働組合の好むところではなかつたのである⁽⁸⁾。このようなSPDと自由労働組との間に於ける政治と經濟との分業關係は、その統一への契機を模索しつゝ一九〇六年九月を迎えるに至る⁽⁹⁾。SPDと組合との対等を規定し、ドイツ労働組合の非政治化を是認したマンハイム党大会こそその挫折点であるが、此の党大会の決定は後の兩組織の離間を運命づけた分岐点と考えられるので、以下に此の大会に至る悲劇的な歴史を回顧して見よう。



1892年	227,023人
1896	329,230
1900	684,287
1904	1,052,108
1908	1,797,963
1912	2,559,781
1914	2,480,000

(註) Varain H., J., Freie Gewerkschaften, Sozialdemokratie und Staat, S. 36.

一九〇五年のロシア革命は政治的大衆ストライキが新しい階級斗争の武器として有効であることをSPDの左派に教えた。だがトレード・ユニオニストにとつて見れば実際の革命の教えるイデオロギー性は彼等を十分恐怖させるに足るものであった。かくて、同年のコロニーヌ組合大会はメーデー・ストを不必要な出費をひきおこすものとして否決した。⁽¹⁰⁾トレード・ユニオニスト達は彼等の意図する経済生活の向上が、一片の法律の制定によつて烏有に帰することを考えなかつたのである。果せるかな同年九月のSPDイェナ党大会は、このような組合の経済主義に対する左派党员の忿満を爆発させた。ペーベルによつて上程された此の大会の決議案は述べている。「党大会は大衆ストライキの最大限の利用こそ、或る条件の下で労働者階級がそれに対する危険な政治行為から自己を防衛し、その解放の為に重要な基本的諸権利を獲

得するための最も有効な武器の一つと認める」と⁽¹¹⁾。この決議案を強力に推進しようとしたのはローザ・ルクセンブルグを始めとする左派であった。左派は彼等の時代が到来したことを喜んだ。ルクセンブルクの言うように、ロシア革命から学ばないのは愚物だと彼等は考えたのである。しかし、組合の指導者でありSPDの議員であるレギーンは此れに反対であった。彼は政治的大衆ストを是認した語句を決議文から削除するよう動機を提出した。「大衆が街頭に出たら戻って来ることはない。つまりのるかそるかである。だから、政治ストを宣伝することは危険だ」と彼は述べている⁽¹²⁾。彼を始めとするトレード・ユニオニスト達は、前述のコロニー組合大会の決定が示すように、政治的大衆ストの結果するものに根本的な疑惑を持っていたのである⁽¹³⁾。この党大会で中央委員会を代表するフィッシャーは、このような組合の動向こそドイツ労働運動の中核にひそむ歎かわしい徴候であり、若干のトレード・ユニオニスト達に社会主義への忠誠が喪失している証左であると指摘している⁽¹⁴⁾。イエナ党大会は、このような情勢の下にレギーンの動議を否決し、バーベルの決議案を圧倒的な多数で可決した、だが、此の際の反対票が主としてトレード・ユニオニストの投じた十四票に過ぎず、ベルンシュタインを含むリビジョニスト達もバーベルを支持したことは⁽¹⁵⁾、ルクセンブルグの解釈したような左派の圧勝を意味するものではなかった。なる程、前述のバーベルの決議案は大衆ストライキの攻撃的な採用に道を拓くかに見えるし、又その故にこそイエナ党大会は大衆ストの戦術性を確認した歴史的な党大会と考えられたのである。ところで、このようなバーベルの決議案が何故かくも圧倒的な支持を勝ち得たのであつたらうか。組合大会はその直前のコロニーに於いてもまたその三ヶ月後のケルン大会に於いても、終始大衆ストに拒否的である。とすれば、ショルスキーの言うようにこゝにタクティシャンとしてのバーベルの本領があつたと見るべきであらう。バーベルの決議案は大衆ストの攻撃的な採用を精密に理論化し

てはおかなかった。ペーベルによれば大衆ストは革命から区別さるべきであり、労働者がその生活に必要な権利を擁護する為の防衛的な武器として、これを採用すべきことを彼は述べていたに過ぎない。⁽¹⁶⁾ だからこそ、三ヶ月後のケルン労働組合大会は、SPD左派の影響を完全に遮断した上で、

「大会は政治的大衆ストライキの宣伝によって一定の戦術をうちだそうとするいっさいの試みを排撃する。大会は組織労働者にたいし此の種の試みに精力的に抵抗するよう勧告する」⁽¹⁷⁾

と述べて政治ストを峻拒することが出来た。それは経済主義を掲げた組合の政治主義への訣別であつたのであり、ドイツ社会主義に於ける党と組合との離間の告白であつた。

かくて、SPDもこのような組合の方針を承認する他はなかった。翌一九〇六年九月のマンハイム党大会は、党と組合との完全な平等を容認し、党が大衆ストを行う場合にはそれに拒否的な組合指導者の了解を要すべきことを承認している。⁽¹⁸⁾ そして自由労働組合はSPDからの独立をこの党大会以降持ち続けるのである。一方に於いて、政治ストを戦術化したルクセンブルグやピークやテールマンなどの指導する急進労働者たちが次第に抑圧され孤立化していくとき、トレード・ユニオズムに魅せられた組合官僚の中立主義理論は、経済生活の向上を口実にして政治からの逃避を組合に命じていたのである。中立主義理論のシンボル操作的な魔術こそ由来官僚技術主義のデバイスであるが、一九〇五―六年に於けるドイツ労働組合の官僚化は、労働者の生活向上をその目的に標榜しながら、結果的には彼等を戦場に馳りたて、彼等の生活を烏有に帰せしめた。ドイツ社会主義の悲劇はかくて深刻となった。

(1) Sturmhail A, The Tragedy of European Labor, 1951, (神川、神谷訳 (I) 二頁)。

- (2) シムイホフ、『國際労働運動史』（國民文庫）、二七六頁。
- (3) 前掲書、一六八頁。
- (4) Schlesinger R., *Central European Democracy and its Background*, P. 104.
- (5) Prager, *Geschichte der U.S.P.D.*, 1922, S. 17.
- (6) Ленин, В., И., *Сочинения*, т. 9, 1941—5 (邦訳『全集第九卷「ドイツ社会民主党イエナ大会」』)。
- (7) フルンケ『ドイツ労働組合運動小史』（國民文庫）四二頁。
- (8) Schlesinger R., *op. cit.*, P. 58.
- (9) Schorske, *German Social Democracy 1905—1917*, P. 49.
- (10) Schlesinger R., *op. cit.*, P. 104.
- (11) Schorske, *op. cit.*, P. 43.
- (12) Varain J., H., *Freie Gewerkschaften, Sozialdemokratie und Staat*, 1956, S. 33.
- (13) *Ibid.*, S. 32.
- (14) Schlesinger, *op. cit.*, P. 104 ff.
- (15) Varain, *op. cit.*, S. 33.
- (16) Schorske, *op. cit.*, P. 43.
- (17) フルンケ、前掲書、五〇頁。
- (18) Schorske, *op. cit.*, P. 49.